

資料涉猟余話

その29

日夏は在学中から飯田の
日刊紙「南信」や、岡村二
一らの創刊した短歌雑誌
『夕樺』（大正10年）に寄稿
するなど故郷とはつながっ
ていたが、昭和5年伯父龍
峽が55歳で急逝、翌年には
飯田町の樋口家を処分、12
月には一切財産整理され人
手に渡ったところから縁遠く
なる。ペロナルを常用す
るようになり、心労からか
発作性心臓急搏症を発症し、
軽井沢・鶴沼など7年間の
療養生活を余儀なくされ、
昭和10年3月には早稲田大
学教授の職を辞した。この
年6月母いしが逝った。

一方で『明治大正詩壇』
（上下巻・昭和5年）、翻訳
『アラビアンナイト』（6
巻・昭和7年）、詩集『咒文』

（昭和8年）・訳詩集『大鴉』

（昭和10年）などが文学者と

して地位を確かなものにし、

「美の司祭」（昭和14年3月）

では博士号を取得、昭和15

年4月から再び早稲田大学

黄眠先生が行く

堆朱翁に会う

嶋 不濁

教授に49歳で復職した。そ
の年5月には法事で帰郷、
これが大患後初めての遠出
だった。没落した大家の坊
ちゃんが10年ぶりで故郷に
錦を飾る帰郷であった。

この様子が『聴雪廬小品』
（昭和15年）「堆朱翁の家」
に記録されている。

※ ※ ※

小学校の同級生たちが飯
田駅に出迎えてくれ、その

日は天龍峽のホテルに泊ま
った。翌日は柏心寺での祭
事を済ませ「人の子のつと
めを無事終へた」と述懐し
ている。自ら編集した亡き
母の歌集『貞心抄』を墓前
に供えることができたのも
嬉しかったらしい。その夜
は飯田泊。

2

翌日は、新聞記者奥村梨
瓶の案内で、妻の添とともに、
随筆の表題になっ
る鈴加町にあった漆師湯浅
光悦（豊太郎）宅を訪ねた。
光悦とは手紙でかねてより
交際があった。その手紙の
何通かは飯田市美術博物館
に寄贈されおり、面会前に
書翰や俳句の遣り取りもあ
った。光悦の工房を訪ねる
のは帰郷のひとつの目的で

もあった。日夏は「耳から
這入る話は目から這入る印
象程はつよく残らない宿癖
がある」ので、話は専ら妻
の添が聴いた。御馳走も勧
められたが、さすがの食い
しん坊の日夏も「飯田の名
物太宰楼の鰻でひる飯を食
べて来たばかり」でかつ体
調も優れなかったらしく、
また夕方は仙壽楼の一席も
用意されていたので少しば
かり箸をつけただけであつ
た。しかし日夏にしては珍
しく機嫌よく「手紙だけで
交際してゐたのが初めて面
晤した喜びの情を抒べるこ
とだけは出来た。す、めら
れるまゝに、飯田へ来ては
筆を執るまいと考へてゐた
禁を自ら破つて、歌と俳句
とを何枚も色紙に書」き、
湯浅家を辞したのであった。

※ ※ ※

なお、湯浅光悦は疎開中

の作品にも折々登場し、ま
た戦争直後、姫城書院（平
安堂書店）で出版した『随
筆 読書山居人』の出版記
念会（昭和21年11月1日
多仙）の写真にも日夏と並
んで写っている。平成3年
1月から3月にかけては米
山直昭が「週刊いいだ」の
「郷土の芸術家シリーズ」で
「堆朱翁」の連載している。



『聴雪廬小品』（昭和15年）